

## 意春坊〈いしゅんぼう〉の墓（氷上町）

約四百年ばかりむかし、播（ばん）州三木城の城主、別所長治〈べっしょながはる〉は豊臣秀吉〈とよとみひでよし〉の軍に包圍〈ほうい〉されて、二年におよぶ持久戦〈じきゅうせん〉の末、とうとう落城〈らくじょう〉し、自殺〈じさつ〉しました。別所長治の菩提〈ぼだい〉寺の住しよく意春上人〈しょうにん〉も落ちていく身となりました。衣のすそをひきずり、よせての喊声〈かんせい〉を後に聞きながら、丹波路〈たんぱじ〉へとむかいました。秀吉の軍にとがめられながら、わらじばきの旅をつづけました。

どれだけ歩いたことでしょうか。ほの暗くなった街道〈かいどう〉をいく僧に、  
「お坊さん、どこへいくのや。」  
「お坊さんはどこからきなさったんやね、もう暗くなるで休んでいきなさんか。」  
めずらしげに子供たちがかけよってきて、声をかけました。  
意春坊も立ちどまりながら、やさしくたずねました。  
「おお、ここはなんというところかな。」  
「ここは市辺〈いちべ〉じゃ。」  
「どれ、どれ、それなら、ここで休ましてもらおうかな。」  
市辺のある家にぬれわらじをぬいだ上人は毎日〈まいにち〉、子供を相手〈あいて〉にくらすことになりました。  
「おはようございます。」  
「意春坊さん、おはよう。」  
「おお、よい子ばかりじゃ、みんなこっちへおいで。」  
集る子供に習字〈しゅうじ〉をおしえたり、彼と子供たちとの間は切っても切れぬものになりました。  
「よおし、きょうから川へいって、一つずつひらたい石をひろうてくるんじゃぞ、坊さんがお経〈きょう〉をかいてやるでなあ。」  
「えっ、お経をかいてくれるのけ。」  
意春は毎日毎日、せつせと、子供のひろってくる石にお経をかきつらねました。

やさしい上人をしたって集るのは子供だけでなく、大人〈おとな〉も老人〈ろうじん〉もしたって集り、悲しいことや嬉しいことを打ちあけるのでした。

…おわれる落人〈おちうど〉の身〈み〉…

…おわれる自分が…

…この人なつかしい人情〈にんじょう〉、もったいない…

無上〈むじょう〉の幸福感にひたりました。

「よし、わたしはこの世の悲しみや災難〈さいなん〉を一身に受けてここに骨をうずめよう。」

彼はひそかに決心しました。

墨染〈すみぞめ〉の僧衣〈そうい〉に身をかためて、鐘〈かね〉を打ちならしながら山へは行っていきました。

「意春坊さん、意春坊さん。」

「先生、先生。」

「よい子だから家へかえておくれ、立派〈りっぱ〉な子になるんじゃよ。」

と、よってくる子供達にいきかきながら山へは行っていきました。

それから、いく日たってもかえてきませんでした。

「リン、リン、リン…。」

と、山からは鐘の音が聞えてきます。

それから、村の人が発見したのは、息もたえだえの意春坊のおごそかな祈りの姿〈すがた〉でした。

「わたしは病気や災難をこの世からまもりませう。もし、鐘の音がきこえなくなったら、どうぞ、ここへ葬〈ほうむ〉ってください。」

それから間もなく鐘の音が消えてしまったといひます。

村の人達はそこに意春坊の墓〈はか〉をつくり、碑〈ひ〉を立てて永久にまつる事になりました。

また、子供達にひろわせた石に書き連ねた経石は、神社横に経塚としてまつられています。

ここ氷上町市辺の山麓にささやかな墓地があり、釈〈しゃく〉意春の墓には今でも、香の煙がたえないそうです。

